

## 「中村哲医師の死を悼む」

2019年12月21日

『週刊金曜日』の12月20日号の「論争」欄に私の投書が掲載されたので、転載したい。

中村哲医師がアフガニスタンで銃撃され、殺害されたというニュースに大きな衝撃を受けた。車で灌漑工事の現場に向かう途中、数人の武装集団に、殺傷能力の高い自動小銃などで襲われ、同乗していた運転手や警備員ら5人と共に命を奪われた。多くの人々の命を支えた師の死は、世界の人から惜しまれ、残念としか、言いようがない。タリバンに加え、「イスラム国」(IS)の組織が台頭して、治安が悪化していた地域だそうで、襲撃は計画的なものであったという。タリバンは今回の事件直後、「復興支援に取り組むNGOとは良い関係にあり、攻撃の対象ではない」と関与を否定している。ISは多国籍軍から攻撃されて弱体化し、世界に四散した。逃れて、アフガンに一拠点を持った彼らの襲撃ではないかという見方もあるらしい。殺害し、恐怖を煽ることを目的とした襲撃で、このような惨劇を生み出す現代社会の闇の深さを思う。中村師は、九州大学医学部で学んだ医師であった。ペシャワールでハンセン病患者の医療活動に携わったことがきっかけとなり、アフガン支援が始まり、多くの診療所も開いた。この間、内戦による国の荒廃と難民の状況を見続けてきた。アフガンは豊かで落ち着いた農業国であったが、他国の軍隊が入り、内戦が収まらない状態になった。師は、アフガンの和平には戦争ではなく、貧困問題を解決することが不可欠だと認識した。支援は医療活動を超え、1,500本もの井戸を掘り、干ばつによって荒れた農地に用水路を建設した。用水路に水が流れ、草も生えない砂漠が肥沃な土壌になり、緑溢れる畑に変わっていった。この変化は奇跡的で、食料を得られるようになった。「戦争のことが伝えられることが多いが、食べ物がなく命を落とす人が大勢いる。目の前の一人を救っていくことの積み重ねが、平和につながる」という信念を貫かれた。師は次のように語っている。「援助する側から現地を見るのではなく、現地からの本当のニーズを提言してゆく。」「アフガンにもごく一部に心ない人がいる。私たちを守ってくれる人もいる。事件によってアフガン全体を断罪しないでほしい。」アフガニスタン人を愛し、彼らと苦楽を共にしている。

米国によるアフガンでの対テロ戦争を後方支援するため、テロ対策特別措置法を審議する衆院特別委員会では参考人として呼ばれ、下記のように証言している。「自衛隊派遣は有害無益である。日本に対する信頼感が、軍事的プレゼンスによって一挙に崩れ去る。」

来日したフランシスコ教皇は、武力を背景にした平和はあり得ないとのメッセージを残したが、師は教皇のメッセージを、そのまま体現した。戦争に明け暮れたアフガンから、一途に平和を追い求めた言動を心に留め、強い意志と深い愛に生きた師のご逝去を悼む。

氏のご逝去を思い巡らす日々が続いている。氏は、家族が揃って食事できる普通の生活が送れるように、井戸を掘り、水路を建設してこられた。渴いた砂漠が作物を生み出す緑の農地に変わっていった。目を見張る光景であった。武器ではなく、命の水が平和を実現すると信じ、実践された。預言者イザヤは、「彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない(イザヤ2:4節b)」と語った。人を殺す武器を、農作物を作る農具に打ち直し、作物を沢山作り、分け合って食べ、満腹する。そこでは、戦いが起らない。師はイザヤの預言を追い、体現された。それは、憲法9条を生きることであった。にこやかに自然体の師の言葉と行動は命の尊厳を認めさせ、平和の道を指し示し、人々の心に「愛」を植え付けられた。